

防災ラジオドラマ

グループ「七ヶ浜町社会福祉協議会」

タイトル「東日本大震災の記憶」

このドラマは七ヶ浜町社会福祉協議会が発行している社協だより第90号、虹色の漣～特別編～をラジオドラマ化した物です。

主な登場人物

鈴木さん（80代女性）

| エピローグ | |
|-----------|---|
| ナレーター | 鈴木さんは昭和8年生まれの80歳。秋田県大館市出身。子育てをしながら地元のスーパーで20年働いたのち定年退職後息子さんが住む宮城県多賀城市の隣町の七ヶ浜町に引っ越してきました。 |
| ① 地震発生前後 | |
| 鈴木 | 最初は生き地獄だと思った。でも後からテレビで見た光景で自分より大変な思いをしている人たちが大勢いる。自分の悩みなんてちっぽけな物。 |
| 鈴木（モノローグ） | 平成23年3月11日私は普段から買い物に訪れている多賀城ジャスコにいました。買い物をすませ14時50分発のバスの中で出発を待っていました。 |
| SE | 地震の音 |
| 鈴木（モノローグ） | 私は必死にバスの座席にしがみつき揺れが収まるのをまっていました。 |
| SE | 悲鳴 |
| 鈴木（モノローグ） | バスの中で出発を待っていた人は一斉にバスの外に逃げ、残ったのは運転手と私だけでした。この時はすぐに出発するだろうと思い車内で待っていました。 |
| SE | 悲鳴 |
| 鈴木（モノローグ） | 悲鳴を聞き店の入り口に目をやると店内から人が一斉に逃げてきました。これを見て私はただ事ではないと思いとりあえずバスから降りました。この時山育ちの私は地震の後に津波が来るという感覚はありませんでした。 |
| 男性 | 津波が来る！高いところへ逃げろ |
| 鈴木（モノローグ） | 屋上から大声で叫ぶ声に気付き私は屋上駐車場へ向かうスロープを必死に登りました。途中から若い男性が私の腕を引いてくれたこと覚えています。 |
| SE | 息切れ |
| 鈴木（モノローグ） | ようやくの思いでスロープを登り切り振り返った瞬間 |
| SE | 津波の音 金属同士のぶつかる音 |

| | |
|--------------------|---|
| 鈴木 (モノローグ) | 真っ黒な津波がさっきまでいた駐車場へ流れ込んできました。私はただこの光景を屋上駐車場から眺めるだけでした。 |
| ② ジャスコ店内にて | |
| 男性店員 鈴木 (モノローグ) | お年寄りとお子様連れの方は店内にお入りください 店内に入るとそこには売り物の布団を開けて敷いている店員のすがたがありました。私もそこで休むことにしました。 |
| SE | 赤ん坊の泣き声 |
| 鈴木 (モノローグ) | 隣の若いお母さんが何も食べていないため母乳が出ず赤ちゃんが泣きだしたので私は手持ちの荷物から食べ物をあげました。 その後、私は多賀城市に住んでいる息子が心配になり携帯電話を捜しましたが家の中に忘れたため、隣の若いお母さんから携帯電話を借り息子の携帯に連絡してみました。 |
| SE | 携帯電話の不通音 |
| 鈴木 (モノローグ) | 何度か携帯にかけてみるも一向に電話はつながりませんでした。 |
| ② セツ浜へ | |
| 鈴木 (モノローグ) | 夜が明け私は家に帰る決意をしました。 |
| SE | 水を歩く音 |
| 鈴木 (モノローグ) | 前日より水の多少引いた駐車場に板が渡してありましたのでそれを渡って道路に出ました。ところが土地勘のない私はどっちに進めばセツ浜かわかりませんでした。丁度仙台方面から若い女性が歩いてきたので道を尋ねることにしました。 |
| 鈴木 | セツ浜はどっちにいったらいいですか？ |
| 若い女性 | 丁度そっちの方へ行くので途中まで一緒に行きましょうか？ |
| 鈴木 (モノローグ) | 4時間くらい歩いたでしょうか。水につかっていない道を歩きようやく土地勘のある貞山橋ところで彼女と別れ、私は自宅へ彼女は塩釜方面へ歩いて行きました。 ようやく我が家に帰りましたが我が家の周りに人の気配がありません。この時私の住んでいる地区は製油所火災により避難指示が出ていました。そのため、私は家の廊下に新聞紙を広げ「中央公民館へ避難します」と息子への書置きを残し避難所である中央公民館へ向かいました。 |
| ③ 難所にて | |
| 鈴木 (モノローグ) | 避難所は前日からの避難者で溢れ返っていました。被災者と被災者の間に一人分の隙間があったので私はそこで休むことにしました。毛布1枚は頂きましたが体育館だったため底冷えしましたが、隣にいた人から毛布を分けてもらい一夜を過ごしました。 翌朝、やはり私は息子のことが気になり自宅に帰る決意をしました。丁度自宅近くまで行く人がいたので、近所のレストランまで載せていてもらいました。お礼を言い降りるときに名前を聞くと |

| | |
|----------------------|--|
| 男性 鈴木（モノログ） | こうゆう時はお互い様だからいいよ。 この言葉は忘れられません。 |
| 男性 鈴木（モノログ） | 私は自宅に戻り地震で散乱した部屋を片付けていました。その後ろからお母さん |
| 男性 鈴木（モノログ） | 振り返ると息子が立っていました。 |
| 男性 鈴木（モノログ） | 家は1階まで水が入ったが家族3人は大丈夫。今は多賀城市文化センターに避難している。 |
| 鈴木（モノログ） | 私はほっと肩の荷が下りた気がしました。 |
| ④ の後 | |
| 鈴木（モノログ） | 息子は時々顔をだしてくれ、孫も泊りに来てくれました。 その後、住宅修理のため息子世帯が1ヶ月ほど同居したので、私も何十年ぶりに息子のお弁当も作りました。 |
| 最後に | |
| ナレーター 鈴木 ナレーター | 鈴木さんは今でも被災した多賀城ジャスコに買い物に行っているそうです。 |
| 鈴木 ナレーター | いつかあの時のお礼を店長さんに言いたいんだけど恥ずかしくてね。 とおっしゃっておりました。 鈴木さんは震災後自分の名前、住所、息子さんの連絡先等のカードを常にバックの中に入れていたそうです。 みんなに助けられながら生きていることが幸せです。 最後に鈴木さんがこのようにおっしゃっておりました。 |